

## 承接形謙譲語に関する

### 適切性判断要因と尊敬語転用

—「お／ご～する」と「お／ご～される」をめぐって—

伊藤 博美

#### 1. はじめに

承接形謙譲語の一つ「お／ご～する」は、菊地(1994)では「謙譲語A」として位置づけられ、

話手が補語を高め、主語を低める（補語よりも低く位置づける）表現である。（p.256）

とされている注<sup>1</sup>。また、「お／ご～する」は、「お／ご」と「する」の組み合わせという、いわば有標性に乏しい形式であることから、成立当初より、いわゆる謙譲語として働く場合も含め、以下の三種類に用いられていたことが指摘されている注<sup>2</sup>。

(1) 謙譲語としての用法（「謙譲語A」としての用法）

「お話しする」「お訊ねする」等。

(2) 「尊敬語+する」としての用法

「ご利用する」「ご出発する」等。

(3) 「美化語+する」としての用法

「お休みする」「お料理する」等。

小松(1967)によれば、「お／ご～する」の成立は明治30年代で、待遇価値の上位を担う「お／ご～申す」に対して、下位を担うものとして、他の「お／ご～いたす」等とともに、次第に使用を拡大していくもの、とされている。また、成立当初から、上記(1)～(3)のような、謙譲、尊敬、美化の用法もあり、そうした実使用のありさまと規範的立場とのせめぎ合いの中で、次第に謙譲語形としての安定性を獲得していくものともされている。

現在「お／ご～する」は、謙譲語Aの代表的なタイプとなっているが、上記のような成立事情等を考えると、当初から謙譲語としての脆弱性を抱えていたということは否定できない。

また、敬語のいわゆる「対者敬語化」に伴い、「話題の敬語」が対者敬語化していく中でも、〈主語〉と〈補語〉、そして話手の三者の関係をとらえた謙譲語Aタイプは、関係認知の困難さもあって、今後変化していく可能性が高いとも言える。

そこで本稿では、「お／ご～する」形に関する認知要因について、尊敬語転用とも関連づけた上で考察を行うものとする。加えて、近年、尊敬語という意識で多用されるといわれる、「お／ご～する」の類似形「お／ご～される」の認知要因についても考察し、今後の方向性について探るものとしたい。

## 2. 先行研究

前述したように、「お／ご～する」の成立事情については小松(1967)に詳細な記述があり、そこでは当初から、尊敬語や美化語に使用されていたことが述べられている。また、菊地(1994)では、「お／ご～する」の尊敬語化の要因として、まず、「お／ご～する」と「お／ご～になる」とを比較し、謙譲語より多く使われる尊敬語の方が一拍長くなっている事実を挙げる。そして、〈語形〉的に短く、しかも簡単に作れる「お／ご～する」の方が、よく使われる尊敬語としての〈機能〉を果たすようになっていくという点について述べ、それを助長するファクターとして〈敬語の大衆化〉を指摘している。加えて、「お／ご～する」の将来像として、私見としつつ以下の4つのケースを挙げている。

- ① 尊敬語と謙譲語の区別がなくなり、とにかく「お／ご～する」といえば丁寧な趣が出る、つまり「お／ご～する」が尊敬語と謙譲語を兼ねて、結果として事実上は〈対話の敬語〉(ないし美化語)として機能するようになっていき、これまで近似的に三分法で捉えられたシステムは全く消失、事実上の〈対話の敬語〉だけが残るという可能性。
- ② 「お／ご～する」は代表的な尊敬語として使われるようになり、一般形としての謙譲語がなくなる、つまり〈話題の敬語〉としての尊敬語と〈対話の敬語〉である丁寧語(および美化語)だけが残るが、尊敬語も〈対話の敬語〉性を強めていくという可能性。
- ③ 「お／ご～される」が尊敬語、「お／ご～する」が謙譲語」という役割分担ができる、「お／ご～する」の尊敬語化にブレーキがかかり、尊敬語と謙譲語の区別は保てて、敬語のシステムも今まで通り維持できる可能性。
- ④ 「お／ご～される」も「お／ご～する」と同系統の語形ということで、〈敬度が違うだけで、両者ともに尊敬語として一般化する〉という方向に向かう。つまり「お／ご～される」の一般化が「お／ご～する」の尊敬語化やそれに伴う前述のようなシステムの消失にますます拍車をかける可能性。

上記①および②はもっぱら「お／ご～する」について述べたものであるが、③と④では、類似語形「お／ご～される」との比較の観点からも述べている。

本稿では「お／ご～する」とその周辺の表現に関わる話者の適切性判断要因を探ることが目的であるが、「お／ご～する」とあわせて「お／ご～される」の認知要因を探ることにより、今後の変化傾向をさぐる上でも有益な示唆が得られるはずである。本稿での見解が直接に将来の方向性予測に結びつくものではないが、両表現に関する話者の認知要因を探ることは、今後の変化傾向予測と深く関わってくるものであるとは言えよう。

### 3. 調査

#### 3. 1 調査方法等

以下の形でアンケート調査を実施した。

調査方法：質問紙による調査。有意サンプルにより実施。（「調査」に関わる被調査者の「負担度」等を考慮し、より適切であると判断したため。）

調査対象：秋田県由利本荘市の高校生と 20～50 代の成人。内訳は高校生 50 名（男 23 名、女 27 名）、20～50 代の成人 44 名（男 14 名、女 30 名）の計 94 名。

調査期日：2002 年 10 月下旬。

ランダムサンプリングではなく、母集団特性を推定するための標本であるとは言いがたいが、調査項目が多岐にわたっており、調査の信頼度を上げるといった面から採用したものである。調査結果に関しては、他の全国調査や先行研究と比較し、あわせて信頼性係数等を算出、調査の信頼性と妥当性、データの一般性と被調査者の回答姿勢等の適切性を確認している。（詳細は以下に述べる。）

#### 3. 2 調査対象者の特性

本調査ではあらかじめ、全国調査との結果比較を行い、調査対象者の特性を確認した上で、分析・考察を行うものとする。

以下に示すのは、文化庁文化部国語課『国語に関する世論調査』（1997～2002）と本調査の同一調査文による調査結果を比較したものである。比較に用いた表現形は以下の通りであり、それぞれの表現について「正しい言い方」「正しくはないが自然な変化」「どちらでもかまわない」「誤用あるいは言葉の乱れ」の形で回答を求めた。ただし、項目 f・g については、本調査で独自に入れたものであり、比較から除外する。

## 文化庁調査と本調査との比較に用いた表現形

- a. 「来ることができる」という意味で、「来れる」を使うこと。
- b. 「おっしゃる」や「言われる」という意味で、「申される」と言うこと。
- c. 「花に水をやる」ということを「花に水をあげる」と言うこと。
- d. 「いらっしゃる」という意味で「おられる」と言うこと。
- e. 放送等で「電車がまいります」と言うこと。
- f. 「お求めやすい」と言うこと。
- g. 相手にたずねる場合、「あなたがお持ちしますか」と言うこと。

次に各表現形で「誤用あるいは言葉の乱れ」以外を回答した比率に関して、文化庁調査の結果と本調査の結果を比較して示す。いわば表現の受容度比較である。

表 3-1 各表現形の受容度 (数値は%)

調査＼表現形	a	b	c	d	e	f	g
文化庁調査	69.9	73.8	83.1	64.4	72.0	なし	なし
本 調 査	75.0	62.0	88.2	67.7	71.7	(80.5)	(25.0)

bにおいて差が大きいと思われるが、これは、本調査での世代別人数比によるものである。高校生世代で「誤用あるいは乱れ」とする傾向が強く、高校生と社会人の平均値においてt検定<sup>注3</sup>を行った結果、5%水準で有意差があることがわかっている。ただし、世代別的人数を補正することにより、文化庁調査とほぼ同じになることも確認している。また、aは、いわゆる「ら抜き言葉」であるが、東北地区では方言形との相互干渉もあり、関東、近畿等と比較して使用に抵抗感が少ないと言われている。文化庁調査(2001)でも同様な結果が出ており、主としてこれは地域的な特性であるといえる。そうした点から考慮すると、これらは、いずれも今回の調査結果の分析・解釈に対する直接的、あるいは大きな要因にはなっておらず、特に問題はないと言える。

次に、被調査者の敬語判断の一般的傾向を確認する。上記例文について、順位相関係数行列(listwise)を表3-2に示す。

相関係数は、被調査者の敬語判断に関する一貫性を確認するために提示したものである。相関係数は、2変数の間に因果関係が存在しない場合でも観測されることがあり、相関をそのまま2変数の因果とみることはできない。非因果的な共変部分が含まれている可能性もある。ただし、これらの組合せは特殊なペアではなく、敬語表現という同一カテゴリ内での比較であり、その意味で相関係数に因果性を認めてよいと言えるだろう。

表 3-2 各表現形の順位相関係数行列

	a(来れる)	b	c	d	e	f
b. 申される	.208*					
c. 花に水をあげる	.175	.075				
d. おられる	.189	.431**	.082			
e. 電車がまいります	.110	.272**	.346**	.144		
f. お求めやすい	.252*	-.053	.394*	.147	.198	
g. あなたがお持ちしますか	.212*	.426**	.218	.073	.009	.081
spearman の相関係数		** :p<0.01 *:p<0.05			N = 92	

表を見ると、b 「申される」と、d 「おられる」およびg 「あなたがお持ちしますか」の相関が高く、いずれも 1 % 水準で有意である。このことは、いずれも「申す」「おる」「お～する」といった謙譲語形を含んだ表現に対し、カテゴリー認知に基づく正確な判断力が働いていることを示している。また、c 「花に水をあげる」と f 「お求めやすい」および e 「電車がまいります」との相関の高さがそれに続いているが、これは、一般的に受容度の高いとされる表現に対して、被調査者が統一した見解を持っていることを示している。ちなみに、これらは美化語あるいは丁重語的に使用されているものもある。

したがって、この数値からも本調査での被調査者が、敬語に対する基本的な判断力を有し、なおかつ調査全体に関して、一貫性を持った回答姿勢で臨んでいることが十分に想定できる。

関連して、本回答での信頼性係数<sup>注4</sup>を算出したところ、0.563 であり、本調査での被調査者の特性が全国データに近いものであり、回答姿勢においても協力的であったことが確認されている。

#### 4. 「お／ご～する」「お／ご～される」形に関する認知判断と尊敬語転用

##### 4. 1 「お／ご～する」の認知判断と尊敬語転用

はじめに、「お／ご～する」に関する認知判断と尊敬語転用について考察する。

調査に際しては、「お／ご～する」を謙譲語 A とみた場合の「正用」と「誤用」と合わせた様々な文タイプ、および「お／ご～する」の中に入る動詞のタイプを変えて調査文を設定した。

調査文中の下線部分は、「お／ご～する」以外の敬語要素も含んでいるが、それについて論の展開上で明らかにしていく。

## 「お／ご～する」の認知判断に関する調査文

- ①（住民が市役所に）「早急にご対処していただきたいと思います。」
- ②（住民が市役所で）「税務課にご案内していただけませんか？」
- ③（住民が市役所に）「〇〇の件に関してお教えしてくださいませんか？」
- ④（住民が市役所に）「〇〇実施の件、お約束してください。」
- ⑤（市役所が住民に）「市民の皆様にもこれでご安心いただけると思います。」
- ⑥（市役所が住民に）「市民の皆様も是非ご出席くださいますよう、お願い致します。」
- ⑦（市役所が住民に）「市民の皆様にも是非ご利用していただきたいと思います。」
- ⑧（市役所が住民に）「市民の皆様にもきっとご満足していただけると思います。」
- ⑨（市役所職員が住民に）「そちらでお待ちしていただけませんか。」

上記の①～⑨の下線部の表現に関して、「自然な言い方」「不自然な言い方」「どちらとも言えない」で回答を求めた。集計に関しては、「自然な言い方」を2点、「どちらとも言えない」を1点、「不自然な言い方」を0点として集計した。はじめに全体の得点状況について示す。

表4-1 「お／ご～する」に関する自然度平均

調査に用いた表現形（略記）	平均値	標準偏差
①ご対処していただきたい	0.37	0.75
②ご案内していただけませんか	0.43	0.82
③お教えしてください	0.47	0.83
④お約束してください	0.78	0.95
⑤ご安心いただけ	1.79	0.58
⑥ご出席ください	1.78	0.59
⑦ご利用していただきたい	1.72	0.67
⑧ご満足していただけ	1.64	0.74
⑨お待ちしていただけませんか	1.21	0.93

(N = 92)

まず平均値を見ると、一見して⑤・⑥・⑦・⑧・⑨が高いことがわかる。このうち⑤と⑥は「お／ご～する」の形式をとっておらず、いわゆる「正用」であり、その他は規範的立場からは「誤用」とされるものである。これを見ると、「正用」とされる表現形が「自然度」が高いのは当然としても、拮抗して⑦・⑧・⑨も高い値を示している。⑦・⑧・⑨の特徴を挙げてみる。

表 4-2 「自然度」の高い「誤用」表現の比較

調査に用いた表現形（略記）	自然度	謙譲語○×	文末の表現形
⑦ご利用していただきたい	1.72	× 「ご利用する」	と思います。
⑧ご満足していただける	1.64	× 「ご満足する」	と思います。
⑨お待ちしていただけませんか	1.21	○ 「お待ちする」	ませんか。

(注) 「謙譲語○×」欄は、その形式の謙譲語の成立の可否。「文末の表現形」欄は、下線部分の文末の表現形を抜き出したものである。

表 4-1 および表 4-2 から、「お／ご～する」の中に入る動詞のタイプが自然度に大きく作用していることがわかる。というのは、①～④は「お／ご～する」の形で謙譲語の用法を持つものであり、それらが自然度が極端に低いことを考えると、「お／ご～する」が謙譲語の用法を持たないものが尊敬語の「正用」として認知されやすい傾向にあることが予測できる。すなわち、「お／ご～する」が謙譲語の用法を持たないものは、謙譲語との干渉が起こらず、尊敬語として認知されやすいという予測である。

だが、それでは、⑨が「お／ご～する」で謙譲語としての用法を持ち（「お待ちする」）ながら、①～④と異なり自然度が高い理由は説明不可能である。蒲谷（1992）では、「お・ご～する」に関わる誤用の問題」として、以下のように述べている。

それが誤用かどうかの判断基準は、用いられる動詞や名詞が「お・ご～する」形式をとる際に客体上位語としての用法があるかどうか、ということになると思われる。あれだけ誤用、なければ誤用とは言いがたい（無論、正しい用法というのではない）ということである。

それに続けて、「『ご指導してください』は誤用、『ご利用してください』は誤用とは言えない」（同）とし、「お／ご」に後接する語の違いにより「お教えしてください」のような形は実際には出にくいとしている。

こうした見解に従うならば、確かに、③「お教えしてくださいませんか」は平均値が 0.47 であり、自然度は低い。だが、同タイプの⑨「お待ちしていただけますか」は自然度 1.21 である。このような大差が生ずる理由としては、以下の点が想定可能である。

[「お／ご～する」に後接する表現形の違いによる影響]

1. 「くださる」と「いただく」がそれぞれ「くれる」と「もらう」の敬語形であり、それらに関する敬度の判断の違いが両者の自然度の差を生んだ。

[場面設定の違いに伴う人間関係に対する判断の影響]

2. ③では、「住民が市役所に」、⑨では「市役所職員が住民に」という場面設定上の違いがあり、場面に対する被調査者の認識・判断が自然度の差を生んだ。

[調査文の配列上の影響]

3. ⑨の前に自然度が高い表現が続いており、⑨の判断時にそれからからの影響（「キャリーオーバー効果」）により、自然度が高くなった。

上記1～3の要因の影響により、③と⑨の自然度の差が出たことが想定できる。だが、これはあくまで根拠の乏しい推測、憶測に過ぎず、納得できる解釈になるとは言いがたい。

そこで、次に各表現について、自然度判断の背後にある潜在因子の探索、意識構造の解明の手段の一つとして、因子分析<sup>注5</sup>を行った結果を提示する。因子分析を用いることにより、上記3のような影響（キャリーオーバー効果）から自由な解釈が可能になるはずである。

以下に結果を示す。

表 4-3 「お／ご～する」に関する因子分析結果

調査に用いた表現形（略記）	因子		
	第1因子	第2因子	第3因子
①ご対処していただきたい	0.006	0.182	0.488
②ご案内していただけませんか	0.028	0.025	0.545
③お教えしてください	0.055	0.313	0.188
④お約束してください	0.134	0.346	0.070
⑤ご安心いただける	0.585	0.110	-0.057
⑥ご出席くださいますよう	0.588	0.171	0.125
⑦ご利用していただきたい	0.693	0.153	0.214
⑧ご満足していただける	0.592	0.290	-0.200
⑨お待ちしていただけませんか	0.315	0.803	0.089
因子負荷量二乗和	1.640	1.045	0.689
寄与率（%）	18.222	11.607	7.653

（注）因子抽出法は、主因子法を用い、バリマックス回転を行った。（KMO = 0.705）

KMO は Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度であり、0.5 以上で妥当性が確保される。

数値はそれぞれ小数第4位を四捨五入している。

因子分析の結果、3 因子が抽出された。次にそれぞれの因子について検討・解釈する。まず、第1因子であるが、一見して、⑦と⑧の因子負荷量が大きく、（それぞれ 0.693 と 0.592）、拮抗して⑥と⑤の「正用」表現（それぞれ 0.588 と 0.585）が続いている。その次にくるのが⑨であるが、他と比べて明らかに負荷量が小さい（0.315）ことから、別にして扱うことが可能である。よって⑤・⑥・⑦・⑧の表現形に含まれた要素を比較し

てみることにする。(⑤・⑥・⑦・⑧は、「お／ご～する」の部分が謙譲語の用法を持たないものである。)

表 4-4 第1因子に関わる表現形の比較

調査に用いた表現形（略記）	用法	謙譲語○×	文末の表現形
⑤ご安心いただける	正用	×「ご安心する」	と思います。
⑥ご出席くださいますよう	正用	×「ご出席する」	お願ひ致します。
⑦ご利用していただきたい	誤用	×「ご利用する」	と思います。
⑧ご満足していただける	誤用	×「ご満足する」	と思います。

(注)「用法」欄は、「正用」か「誤用」か、の判断である。また、「謙譲語○×」欄はその形式が謙譲語として成立するか否か、であり、「文末の表現形」は調査文の下線部分の文末の表現形である。

表 4-4 を見るとわかるが、これだけでは、⑦と⑧の因子負荷量の大きさの説明は困難である。そこで、表現形の動詞部分に着目するものとする。すると、⑦と⑧は、動詞部分がそれぞれ「利用する」「満足する」であり、他の⑤と⑥と比較して、語彙的意味として、聞き手にとって利益性の高い内容となっている。例えば⑤の「安心する」は、本来そうあるべき状態（安心できる状態）に戻ったことを含意しており、その点で⑦と⑧に比較して、聞き手の利益性は低いと言える。リーチ(1987)では、「丁寧さの原則」として「他者に対する負担を最小限にし、他者に対する利益を最大限にせよ」としているが、聞き手にとって利益が大きいとみなされることは、必然的に高い待遇性をも有することになると言える。

このような点から言えば、「お／ご～する」形を持つ表現の自然度比較では、「お／ご～する」に関わる判断が主要因となりながらも、必ずしもそれだけではないことが指摘できる。動詞の語彙的意味が有する、「聞き手に対する利益の供与」という、いわば「物理的恩恵性」の大きさと、「くださる」「いただく」の違い、当該表現中の「お／ご～する」が謙譲語としての用法を有するか否か、それと、文末表現によって、総合的に判断されている可能性が高い。

つまり、「お／ご～する」に関わる判断を主要因としながらも、その他の要因も副次的に影響していると言えるのである。文末表現の「と思う」も、直接的に待遇価に関わる表現であると想定されるが、この点についてはさらなる検討が必要であり、解釈の可能性といった形にとどめておきたい。

さて、以上の点から、第1因子についてまとめるところにする。これまで因子解説に関わる可能性があるとして読みとってきた要素について整理すると、以下の3点が挙げられる。

- i) 「お／ご～する」形が謙譲語としての用法を持つものと持たないものの違い。
- ii) 表現形中の動詞の語彙的意味の持つ聞き手にとっての利益性の高さの違い。
- iii) 敬語要素「いただく」「くださる」から聞き手が感ずる待遇価の違い。

このうち、まず、⑤・⑥・⑦・⑧の、①・②・③・④に対する因子負荷量の大きさから、i が、次には⑦と⑧の因子負荷量の大きさから、ii が作用し、その周辺的なものとして、若干ながら iii が関わっていることがわかる。

因子分析は、話者が自然度を判断する際にどういう要因が作用しているかを遡及的に想定するものであり、因子に対する総合的判断において恣意性が介入する危険性があることは否めない。こうした点も考慮し、ここでは解説・判断の単純化は避けておきたい。以上が第1因子である。

次に第2因子に着目する。第2因子では⑨が因子負荷量(0.803)で突出している。⑨だけが突出する理由を挙げるならば、これが前述した調査票上の項目配列上の問題（「キャリーオーバー効果」）であると言える。よって特に第2因子はこの場合特に重要視する必要はない。

最後に第3因子である。第3因子では、①と②が高い。両者はともに要求・依頼文である。⑦と③がそれに続いているが、表現全体が有する聞き手に対する依頼の程度は①と②より小さいと言える。よって、第3因子は、聞き手に対する要求・依頼度の違いであると言える。要求・依頼も聞き手に対する負担度から、待遇価に関わってくる問題である。第3因子から読みとれることを整理すると、

- iv) 表現形の文タイプの違い。要求・依頼性が強いか否かの違い。

ということになる。

このように、「お／ご～する」の自然度判断においては、その形が謙譲語の用法を持つかどうかを中心にして、表現形全体の待遇価の高さに対する判断が副次的に、かつ強さの違いを持って行われていることがわかる。

なお、調査の際、別の形で調査文として入れた「先生にご指導していただいたおかげで論文が書けました」も含めて、同方法で因子分析を行った結果、第1因子中の、⑦と⑧の次の群にランクされた。表現は「ご指導する」が使用機会が限られながらも（例えば趣味などに関して目上を指導する場合）謙譲語としての用法があることなども考えると、やはり、表現形全体の待遇価が判断に大きく影響していることが想定できる。

以上が、「お／ご～する」を含む表現形の自然度判断の要因と意識の分析結果である。

#### 4. 2 「お／ご～される」の認知判断と尊敬語転用

次に、「お／ご～される」に関し、その認知判断と尊敬語転用について考察する。

これに関しても、文タイプ、および、「お／ご～される」の中に入る動詞のタイプを様々に変えて調査文を設定した。調査文は以下の通りである。

##### 「お／ご～される」の認知判断に関する調査文

- ① (学生が教員に) 「先生は明日ご出発されるのですか。」
- ② (学生が教員に) 「先生はバスをご利用されていますか。」
- ③ (学生が教員に) 「先生は何時の電車にご乗車されますか。」
- ④ (学生が教員に) 「先生はもうあの方へはご連絡されたのですか。」
- ⑤ (学生が教員に) 「先生はあの方とはお約束されたのですか。」
- ⑥ (学生が教員に) 「先生はもうあの方にはお話されたのですか。」
- ⑦ (学生が教員に) 「先生はもう〇〇市にお移りされたのですか。」

上記の①～⑦の下線部の表現に関して、「お／ご～する」同様に「自然な言い方」「不自然な言い方」「どちらとも言えない」の選択肢で回答を求めた。集計に関しても、「お／ご～する」同様、「自然な言い方」を2点、「どちらとも言えない」を1点、「不自然な言い方」を0点として集計した。なお、下線部分は、「お／ご～される」以外の要素も含んでいるが、いずれも質問形であり、「です・ます」を含んでいる点で共通している。

全体の得点状況について示す。

表 4-5 「お／ご～される」に関する自然度平均

調査に用いた表現形(略記)	平均値	標準偏差
①ご出発されるのですか	1.13	0.94
②ご利用されていますか	0.89	0.97
③ご乗車されますか	0.95	0.95
④ご連絡されたのですか	1.26	0.93
⑤お約束されたのですか	1.32	0.92
⑥お話されたのですか	1.28	0.94
⑦お移りされたのですか	0.37	0.73

(N = 94)

「お／ご～する」の場合と比較して、総じて標準偏差の値が大きく、判断に個人差が見られる。菊地(1994)では、「お／ご～される」について、様々な類似形からの心理的影響を挙げた上で、「およそ敬語を使い慣れた人なら、まず使わない形である（あった）ということは、いえそうに思う。」(p.413)としている。文化庁調査(1997)では、「お／ご～される」を用いた形について、「正しく使われている」を回答した全体平均は72.6%（東北地域は77.4%）であり、中でも高校生の男子と40代以上の男女が全般的に高くなっている。表4-5に戻ると、⑦の「お移りされた」が他の表現より自然度が極端に低くなっている。標準偏差も小さい。予想されることとしては、⑦だけが、「お／ご～される」の「お／ご～」と「される」を切り離した際、「お／ご～」の独立性が低く（「お移り」）、単独で名詞として用いられない表現であることが挙げられる。

次に「お／ご～する」と同様、因子分析の結果を提示する。

表4-6 「お／ご～される」に関する因子分析結果

調査に用いた表現形（略記）	因子		
	第1因子	第2因子	第3因子
①ご出発されますか	0.526	0.343	0.005
②ご利用されていますか	0.924	0.065	-0.087
③ご乗車されますか	0.654	0.184	0.237
④ご連絡されますか	0.174	0.690	-0.115
⑤お約束されますか	0.324	0.743	0.084
⑥お話されますか	0.022	0.535	0.251
⑦お移りされますか	0.038	0.040	0.528
因子負荷量二乗和	1.695	1.473	0.426
寄与率（%）	24.215	21.036	6.084

(注) 因子抽出法は、主因子法を用い、バリマックス回転を行った。(KMO = 0.690)

数値はそれぞれ小数第4位を四捨五入している。

以上のように、3因子が確認された。それぞれの因子について検討するものとする。第1因子では、②の因子負荷量が突出し、その次に③と①が続いている。①・②・③は、ともに「お／ご～」に「する」を付加した「お／ご～する」の形が謙譲語としての用法を持たないものである。ただし、⑦も「お移りする」とした場合、謙譲語の用法は持たないが、因子負荷量は小さい。

①と②および③を比較すると、②は、①と③に比較して、質問内容として、聞き手の判断領域に対する侵入度が低いということが挙げられる。というのは、①「出発する」と③「乗車する」は、それが義務的に決定している行為でない限り、行為の決定・遂行

権は聞き手に属しており、いわば聞き手領域性の強い表現<sup>注6</sup>であると言える。他方、②の「利用する」は、聞き手の個人的行為でありながら、「バスを利用する」行為全体として見た場合、バス利用に関する一般性の高い質問とされるものであり、①と③に比較して、聞き手領域に対する侵入度は低いといえる。とは言え、この解釈は②の突出性に関し、あくまで「可能性を持つ解釈」であり、根拠に乏しいことは事実である。

それでは、②の突出要因は何か。もう一度自然度の平均値を確認する。すると、④・⑤・⑥が高く、②はむしろ低い。また、⑦「お移りされた」の低さに関して、「お移り」の独立性が低いことは前に述べた。それらを考慮すると、「お／ご～される」の認知判断については、「お／ご～」と「される」とを一旦分割し、その後に加算しているという予測が可能である。

そのようにみた際、両者の間に入る語が問題となるが、この場合の「される」は「する」の尊敬語と解釈できるから、被調査者が「される」の前に挿入する可能性の最も高いものは「ヲ格」の格助詞ということになるはずである。つまり、被調査者の認知・判断に関して②と③を例にとり、前後を分割、ヲ格挿入すると、

(4) ②' \*先生はバスをご利用をされていますか。

③' 先生は何時の電車をご乗車をされますか。

となる。ヲ格挿入により、②は、「バスを」のヲ格と「ご利用を」のヲ格という、いわゆる二重ヲ格制約に反することになり、非文になってしまう。このタイプは①～⑦の質問文の中で②のみであり、このことが、②が最も因子負荷量が大きくなっている理由であると考えられる。

つまり、第1因子では、「お／ご～される」を分割し、加算的に判断する際、二重ヲ格制約に反するかどうか、が主要因となっていると言えるだろう。そして、その次に、①・②・③に共通した因子負荷量の大きさから、「お／ご～」が「する」が結びついた際の謙譲語の用法を持つか否か、という点が挙げられる。そのように解釈すると、①および③に比較して②の因子負荷量が突出している要因と、①と③が拮抗してそれに続いている理由を整合的に説明できる。

菊地(1994)では、「ご説明される」を例に挙げ、「ご説明をされる」などの類推から「ご説明される」を作る心理が働くのだろう、との説明をしているが、この結果は、そうした類推を裏付けるものであり、認知判断の際に、それが最も大きな要因として作用していることが確認できるのである。被調査者は、「お／ご～される」について自然度判断する際、意識的にせよ、無意識的にせよ、前後を分割してヲ格挿入を行っており、その際に表現として自然なものかどうか、という判断を働くさせているのである。

次に第2因子を見る。因子負荷量が大きいのは、④・⑤・⑥である。いずれも他の選択肢とは異なり、「お／ご～」と「する」を承接させると、謙譲語としての用法が成立するものである。

ちなみに、「お／ご～される」の尊敬語用法を「誤用」とする理由としては、次の二つの立場がある。

a. 「お／ご～される」は過剰な二重敬語であり、不適当とする立場

窪田・池尾（1971）など

b. 謙譲語形「お／ご～する」に「れる」を付けた形にあたるので誤りという立場

文化庁『ことばシリーズ5』（1976）など

上記 a は、二つの敬語要素を認めるという点で、「お／ご～される」を要素の加算的なものと捉える姿勢が根底にあり、他方 b は、「お／ご～する」がひとまとめの表現であることを前提にしている。このうち、第 1 因子の分析結果は、a の立場を裏付けるものであり、また、b の立場に関わる要因は第 2 因子であると見ることができる。したがって a. b の立場はそれぞれ第 1 因子と第 2 因子に関連していることが確認できる。

最後に第 3 因子であるが、因子負荷量が大きいのは⑦である。⑦は、「お／ご～される」を分割して考えた際、「お／ご～」の部分の独立性が低いものであった。したがって⑦は、第 1 因子に関わる判断を行った際にふれた「お／ご～」部分の独立性の問題であることが確認できる。

以上、3 因子について被調査者の意識と関連づけて分析した。結果として、以下のことが確認できた。

- i) 「お／ご～される」を分割・加算的に判断し、ヲ格挿入を行った際、同格衝突を起こす（二重ヲ格制約に反する）か否かの違い。
- ii) 「お／ご～」が「する」と結びついた際、謙譲語としての用法を持つかどうかの違い。
- iii) 分割した際、「お／ご～」が独立した表現形となりうるかどうかの違い。

以上のように、「お／ご～される」を含む表現の自然度判断は、「お／ご～」と「される」とを分割する形で、敬語要素を加算的に捉えつつ、それに加えて、「お／ご～する」との干渉が働き、なおかつ「お／ご～」の部分の独立性が低いと不自然さが残るといった形で行われることがわかる。

なお、こうした判断に関する性別・年齢別の属性差、あるいは各種意識との関連性であるが、年齢層によって差があると思われる項目もあったが、各種検定の結果では、有意である、と言う程ではなかった。

以上が、「お／ご～される」を含む表現形の自然度判断の要因と意識の分析結果である。

#### 4. 3 認知判断に関するその他の要因

ここまで、「お／ご～する」および「お／ご～される」の被調査者の認知判断の基準とそこに見られる意識構造について、特にそれらが尊敬語として受容されていく要因を中心に考察してきた。ここでは、それらに加え、認知判断に関する他の要因についてふれておく。

菊地(1994)では、「お／ご～する」について、

「…を（に・から・と・のために）」などにあたる〈補語〉を高め、相対的に主語を低める〈謙譲語A〉である。ただし、語によっては、「お仕事する・お料理する」などのように、謙譲語Aとしてではなく、単にいわば《上品》に述べるだけの美化語として使われるものもある。(p.282～p.283)

と述べている。「お／ご～する」が成立当初から尊敬と美化の用法が存在していたことは前述した通りだが、「お／ご～する」には現在も美化語として安定的に使用されているものも多く、「お／ご～する」の認知、判断にはそれらの存在が与える影響も考えられる。

また、尊敬語は、基本的に話手と〈主語〉の関係に属することであるが、謙譲語は、話手と〈主語〉それに〈補語〉の三者が関わるものであり、関わる方面についての認知・判断の負担は尊敬語に比して大きいことは確かである。こうした要因も「お／ご～する」の認知判断に関わっているはずである。

こうした「お／ご～する」形式と謙譲語に固有の問題もあることは確かであるが、それについては別の機会に論じたい。

#### 5.まとめと考察

これまで述べてきたことを整理すると以下になる。

##### (I) 「お／ご～する」の自然度に関する認知判断

- i) 「お／ご～する」形が謙譲語としての用法を持つものと持たないものの違い。
- ii) 表現形中の動詞の語彙的意味の持つ聞き手にとっての利益性の高さの違い。
- iii) 敬語要素「いただぐ」「くださる」から聞き手が感ずる待遇価の違い。
- iv) 表現形の文タイプの違い。要求・依頼性が強いか否かの違い。

## (II) 「お／ご～される」の自然度に関する認知判断

- i) 「お／ご～される」を分割・加算的に判断し、ヲ格挿入を行った際、同格衝突を起こす（二重ヲ格制約に反する）か否かの違い。
- ii) 「お／ご～」が「する」と結びついた際、謙譲語としての用法を持つかどうかの違い。
- iii) 分割した際、「お／ご～」が独立した表現形となりうるかどうかの違い。

上記のそれぞれを通時的な変化要因ともみなすことが可能ならば、それぞれについて以下のようにいえる。

「お／ご～する」(I) の尊敬語用法に歯止めをかける要因としては i) が挙げられるが、その他は、尊敬語用法を容認するものである。

同様に、「お／ご～される」の尊敬語用法に歯止めをかけるものとしては、i)と ii) が挙げられる。ただし、例えば i) について言えば、要因自体としては大きいものの、実際の発話および文において要因が作用する機会が少なければ、それは歯止め要因としては小さなものとなる。作用しなければ、むしろそれは、二つの敬語要素を持つという意味で、尊敬語化の加速化要因ともなりうるのであり、その事は、表現形④・⑤・⑥の自然度平均の高さに表れているとみることができる。その他の要因についても同様の面を持っていることは確認しておきたい。

敬語は、菊地(1994)にもあるように、〈語形〉〈機能〉〈適用〉の三つの観点でとらえることが必要であり、話者も実際の使用にあたっては、意識せずともこうした観点で総合的に判断しつつ使用しているものと思われる。それゆえ、話者の心理と認知・判断に基づく本調査での分析は、今後の謙譲語の変化傾向に有益な示唆を与える可能性を持っているのかもしれない。

ただし、今回の調査と分析は、被調査者を標本とみなした場合の現時点での意識・判断傾向であり、それをそのまま通時的な変化に適用することはできない。だが、現時点での話者の心理をふまえた認知・判断傾向が変化しないで今後も続していくと仮定できるならば、予測すること自体は許されてよいだろう。

ここで、これまでの結果をもう一度確認しつつ、今後の変化の方向性について探るものとする。

まず、「お／ご～する」に関してであるが、上記 (I) から、尊敬語としての使用を加速化する要因としては、ii)・iii)・iv) が考えられる (iii)と iv) は、「他の敬語要素」という形でまとめることが可能)。これらは、「お／ご～する」が含まれた表現について、「お／ご～する」以外の要素に着目するものである。これらの要因が強まると、「お／ご～する」は、謙譲語から尊敬語へ、というよりも、対者敬語化の流れに添う形で、

菊地(1994)のいう〈対話の敬語〉化し、「お／ご～する」と言えば丁寧な趣が出る、といった認識に変わってしまう可能性を持っている。他方で、「お／ご～する」を謙譲語として保持させる要因としては i) がある。i) は、「お／ご～する」の形は基本的に謙譲語である、という認識の保持であり、「お／ご～する」の尊敬語化に歯止めをかける要因となっている。i) は他の要因と比較して、自然度の認知・判断に最も影響する因子である。

だが、例えば、『日本語基本動詞用法辞典』(大修館書店)を例にとると、謙譲語の「お／ご～する」となりうるのは、記載の全動詞の約2割弱である。尊敬語となりうる動詞の方が謙譲語となりうる動詞より比率が高いと思われることとあわせ考えると、「お／ご～する」が取り得る動詞の比率の低さは、i) の意識が働く機会の少なさと重なってくる。そうした面も考慮すると、「お／ご～する」は、頻用される一部の表現のみが、慣用的に謙譲語として残っていく可能性が高いとも言えるだろう。

次に「お／ご～される」(II)であるが、自然度の認知・判断の際、i) や ii) から、「お／ご～」と「される」の部分に分割し、加算的に判断している傾向が確認されている。二重ヲ格制約は歯止めにはなるが、分割によって、後半部分「される」が、いわゆる「レル敬語」化する可能性が高く、今後の尊敬語使用を加速化する要因になるものと言えよう。尊敬語化に歯止めをかける要因としては、「お／ご～される」の「お／ご～」に「する」を付加した場合に謙譲語となるかどうか、という認知・判断である ii) が挙げられる。ただこれは「お／ご～する」の謙譲語としての機能の保持を前提として働くものもある。したがって、単独で作用するものとは言い難く、「お／ご～する」の今後の変化と密接に関連しているのである。

以上、「お／ご～する」と「お／ご～される」の今後の変化に関する要因について、尊敬語としての使用を加速化する要因と、そうした傾向に歯止めをかける要因について整理した。

最後に認知・判断要因を今後の変化傾向と関連づけると図 5-1 のようになる。

## 6. 今後の課題

今回の結果と分析は、調査の一部に基づくものであるが、今後は、謙譲語固有の問題はもとより、話者の敬語使用に関する意識と関連させたものも含め、詳細に検討していく予定である。

また、被調査者の範囲を拡大、あるいは調査地域を変えて実施し、今回の調査・分析と有意差があるかどうかについても考察したい。

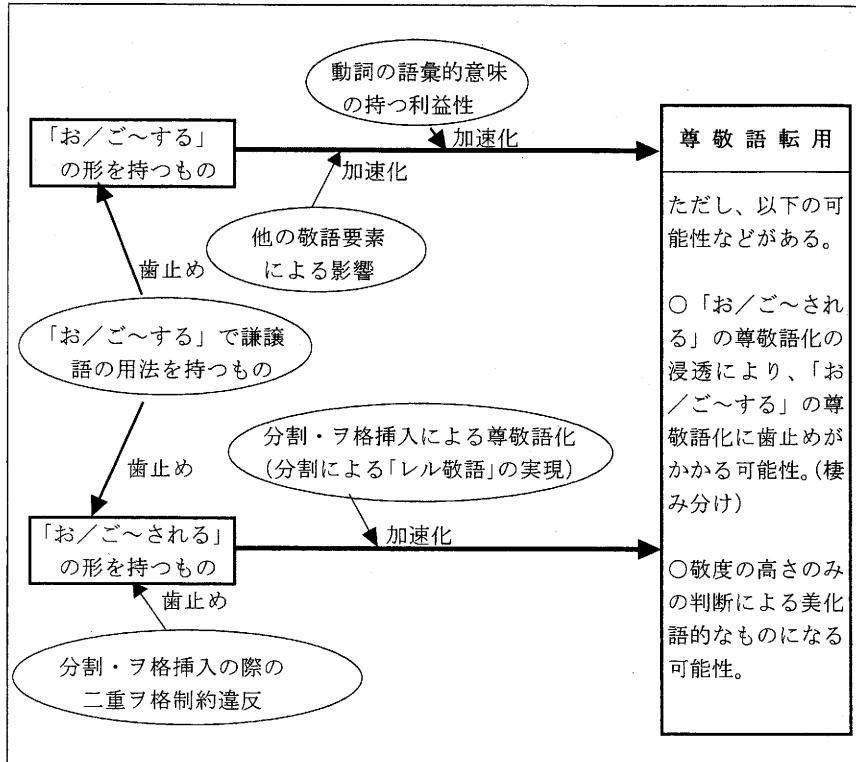


図 5-1 「お／ご～する」と「お／ご～される」の認知判断と尊敬語転用

(注) 上図の楕円は認知・判断に関わる要因であり、大きさはほぼ要因の大きさを表す。要因間で大小比較が不可能なものは、楕円の大きさと同じにしている。

「お／ご～される」に関わる各要因について補足説明する。

- ① 「分割・ヲ格挿入の際の二重ヲ格制約違反」とは、「お／ご～」と「される」の分割に基づく自然度判断によるもの。例えば、「バスをご利用をされる」等になるため、「ご利用される」は不自然とされる。
- ② 上記①に関連して、二重ヲ格制約に反しなければ、「お／ご～」に「レル敬語」が加わった形と判断されやすい。そのため、分割による判断は、積極的に尊敬語化の加速化要因として作用する面もあわせ持つ。

### [注]

注1：本稿での用語および枠組みについては基本的に菊地(1994)に従うものとし、敬語上の主語を〈主語〉、「…を（に・から・と・のために）」にあたる高められる対象を〈補語〉とする。

注2：小松(1967)および小松(1968)に詳細な記述がある。

注3：t検定は、t分布という理論的に考えだされた分布に従う検定統計量を用いた二つの母集団の検定に用いるものであり、2つの母集団の平均値と標準偏差、各標本数によって決定する。

注4：信頼性係数は、関心下のテストが相対的にどの程度眞の個人差を捉えることができるのかを表す指標である。ここでは、平均値と標準偏差、分散を用いたクロンバッックのAlpha係数を採用しており、信頼性係数が1に近いほどテストの信頼性が高いと考えられる。本論文での「お／ご～する」に関する調査、「お／ご～される」に関する調査の信頼性係数は、それぞれ、0.648、0.715となっており、十分に信頼性は高いと言える。

注5：因子分析は多変量解析の一手法であり、多数の変数から得られたデータを小数の因子とよばれるモデル上仮説的に構成された変数によって説明しようとするものである。各数値は変数と因子の相関係数の形で表される。なお、バリマックス回転によって得られた因子は、因子間の相關が0である。

注6：鈴木(1997)に〈聞き手の領域〉に関する段階性についての記述がある。

### [参考文献]

- 菊地 康人 (1994) 『敬語』 角川書店 引用は講談社学術文庫版(1997)による
- 小松 寿雄 (1967) 「「お…するの成立」『国語と国文学』44巻4号 東京大学国語国文学会
- 小松 寿雄 (1968) 「「お…する」「お…いたす」「お…申し上げる」の用法」『近代語研究』2集
- 蒲谷 宏 (1992) 「「お・ご～する」に関する一考察」  
『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』 明治書院
- 窪田 富男・池尾 スミ (著作権者は文化庁) (1971) 『日本語教育指導書2 待遇表現』  
大蔵省印刷局
- 文化庁 編 (1976) 『ことばシリーズ5 言葉に関する問答集2』 大蔵省印刷局
- G. N. リーチ (1987) 『語用論』 池上嘉彦・河上誓作 訳 紀伊國屋書店
- 鈴木 瞳 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」  
『視点と言語行動』 田窪行則 編 くろしお出版

### [参考資料]

- 小泉 保・船城 道雄・本田 靖治・仁田 義雄・塙本 秀樹 編 (1989)  
『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店
- 文化庁文化部国語課 (1997,1998,1999,2000,2001) 『国語に関する世論調査』

(いとう ひろみ 大学院人文社会系研究科 博士課程1年)